



南總里見八大傳第九輯 卷二

イ曾行  
600  
280





14  
600  
280

南總里見八大傳第九輯卷之四十二上

東都 曲亭主人編次

第百六十九回 野坑を拾出されて親兵衛賜を受く  
風葉を帚除いて諸勇士立談を



話表を大塚信乃成孝の料も葛西の底不知野の頭也大江親兵衛  
仁が為二騎の敵を斃死して他が親山林夫婦の舊恩を報ひのする底  
不知の坑に陥り親兵衛も亦恙なく件の坑より吹起を勁猛風吹騰され  
けん馬故の儘ゆく出ると信乃が欽ひるやあは眼と定めつら  
つらと見竹然として先向を大江和殿の幾の間小京師より来る今番の  
役も参り會する況や二騎の敵を趕逐して諺てあ坑に陥りて見えまらし  
特小奇に坑中より白氣立外とあり且猛可なり風音雷延の响と











其芳名と自家の士卒中の敵も知らず欲する所の死と心の誠  
らち出づ告もあつ同も尋る閑談細やうえけれ親兵衛馬上頭と依て所傳  
坐不感涙の進むと覚む長嘆して果せるく至誠の必や神の如く大塚主の  
孝順忠信の人の及ぶ所を誠心誠意信々最厚くも敦くも  
あふ不測の援とて相逢ふをばけんや我身の必敵の鎗刺れて身の  
坑の命終らば人知ざしそるべけれ然る再生の洪恩と千言萬句の盡たも  
嗚るもあふぞか。宣定此上る幸ひる哉就て唯雪直塚の伴當殿  
兵を領て今朝もかゝる末の程料もゆける這馬の足撥任せし御曹  
司の御危戦を援けなり。且勅敵長尾景春と數破ら走らせ其子長尾  
為景と擒めり。又那河鯉佐太郎の政木大全孝嗣石龜次因太越卿と  
三人共幸ひ申てかの折死る月屬西國河原る。向水五十三太宿所存り。

我ら先御曹司の聞戦を援けまろ長尾と柱を力戦せり都て是れ  
も。會話の言れも枯草繁れ処で下馬も屍を掛る石を見  
那里故る松の下に結縷草あり穂を宜し卒久那里も俱の意衷を誓  
まべしとの信乃も見えり。現那松蔭をよめれ和殿の据りて肇て知原未  
御曹司も亦御出陣せり。長尾と戦ひぬ。秋部語云燈臺の倒し下層して  
今肇てゆく鈍き。況や政木石龜若くも最も芽出た珍説又驗所  
も。本々との信乃も俱馬を歩む。徐小松の邊に造りて下馬し餘  
發を折る大飼現八杉倉直元田税途友真間井秋季頭人隊長陸續と信  
乃も從て寄隊の両將頭定成氏の敗れ走りて趕捕へん。索ねてあふあけ  
る信乃が一個若武者と共侶憩居るを遙く見て現八も自餘の隊長と  
俱馬より下立し。我らも信乃の如く犬塚和殿の頭定主を那里へ趕亡し。



唯るの副將憲房と獲れぬ。継橋綿四郎門下守りせ。吉室の城へもあせり。卒立の共侶も索ねて頭定を捕へんと。親兵衛と見ゆ。胆を潰し。又左見右見て大江和殿の幾間。京師よりかへる。多。這戰場に在り。と問へ。親兵衛微笑て。然。唯るの今朝の地。馳跡。御曹司の御危戦を援け。敵兵の迷るを討つ。野邊の料。必死の厄あり。と幸ひ。犬塚を搦れて。今。這里に多。時過れば。甲も實者。所へ。今。急務の管領の往方。求獵て。懲ま。異日。又。冠。本。共。侶。立。の。後。と。信。乃。の。林。ゆ。徐。の。中。犬。飼。の。情。を。這。回。館。の。御。軍。令。只。防。禦。と。旨。と。て。殘。忍。慘。刻。の。掙。を。饒。し。ぬ。非。如。寄。隊。の。將。帥。と。も。逃。去。脱。も。寛。仁。大。度。の。御。旨。を。稱。ふ。べ。れ。と。現。八。忽。地。覺。り。て。然。と。我。行。心。ぬ。今。人。馬。を。總。

へて敵一人も在る。岡山の陣所へかへる。後方を見れば直元。逸友ある。秋季と共侶。親兵衛。歸國の勢を舒ると。當下。信乃の現八。告る。村と素。射て。斃。け。事。と。首。親。兵。衛。が。誤。て。人。馬。も。野。中。の。坑。へ。陥。り。折。信。乃。も。其。兩。敵。と。斃。あ。り。又。親。兵。衛。の。坑。中。より。吹。起。き。猛。風。吹。出。され。て。騎。馬。の。儘。中。を。出。る。の。尾。を。其。大。夏。を。説。示。大。家。所。々。感。嘆。を。并。が。中。現。八。笑。片。回。て。信。乃。の。公。方。犬。塚。和。殿。の。掙。死。の。都。て。至。妙。あ。ら。ぬ。就。中。横。堀。史。在。村。と。新。織。帆。太。夫。素。勢。を。射。斃。せ。愉。快。入。那。在。村。が。奸。佞。多。君。と。怒。一。民。を。虐。け。能。と。媚。賢。と。憎。賢。と。我。芳。流。閣。を。和。殿。と。組。敷。の。微。と。其。竟。那。奴。小。虐。け。ら。れ。牢。獄。中。の。命。終。ん。又。新。織。帆。太。夫。も。常。在。村。の。媚。説。て。皇。義。と。和。殿。の。掙。捕。と。請。美。勢。德。を。求。獵。し。惜。む。大。江。の。爺。嬢。死。て。和。殿。を。救。束。至。れ。今。番。那。奴。



ちと敷き漏る。弥勒のせまで後悔其甲斐をうらみ天羅張得て路を譲らぬ。和  
 殿小誅戮せられの造化小兒の羊帳精細定小脱落あると云。況や和殿が山  
 林小報恩の前言と今番の役小果さまべと神をまぎて誰ぞ知るぞ待難て  
 云云と催促ある人いもあぶ鄙語の親の心と子知まふとあべけれといひつ阿々と  
 うち笑へば親兵衛の愀然たる貌を改め且信乃もふらち向ひて犬塚上犬飼も所  
 多。頃末の一朝小晝がかり開け且言省て我厄解けてやうな華洛を辞去  
 己の十一月二十四五日の時候より小憶路小掩留して今朝稍去の地小馳就  
 ける首と小箇様々々尾へ又箇様々々と名馬走帆のめ又信濃路を這回  
 役ありとぞ知りし。又千住河原中。愛馬青海波の河を渉して來ぬ。小逢  
 ち。並馬次見活間野目奴九郎のめ及三四的寄舎五郎須々利壇五郎のめ

又親兵衛門が長尾景春と敗り走り去り。且再戦して長尾為景と生拘り。め  
 亦政亦孝嗣石龜次園太越卿三名が再生の事此頭末及向水五十三太枝獨鉗  
 素の吉が義侠のめ並孝嗣の義小仗て次園太卿三十三太素の吉と俱小  
 其母をぬ。義道君の聞戦を援け軍功あり。都て敵を甘言を約小  
 漏れと告。現八以下の頭人隊長所々俱小感佩して美談とを稱  
 當下信乃の笑。親兵衛向ひて大江上原來那青海波の昨宵盗見小  
 牽去られとぞう。今覚得り。渡莫昨宵岡山の陣營の三面奇隊小戦  
 車り。圍れ。鼠も暢。且其の方。泉茶河多。他い。めて。潜入。馬。竊。出  
 見。神。変。不。測。と。い。ま。く。の。現。活。馬。の。目。抜。郎。が。竊。術。を。怪。し。けれ。と。い。ふ。大。家  
 堪。難。て。齊。一。吐。と。笑。ひ。けり。姑。且。七。信。乃。の。又。親。兵。衛。向。ひ。て。多。う。大。江。這。里。曠  
 野。で。君。命。と。傳。る。宜。地。方。る。ね。と。も。明。日。ま。で。閑。く。居。る。あ。ら。ね。と。謹。て。美。事。ら。ね。と





あのせうろ  
信乃松下  
えめあ  
君命を親  
兵衛おつた





親兵衛河と応て身を引降して跪け信乃がひさし。曩小洲崎の御陣を館  
みづろ軍令を定させぬり時大坂毛野を軍師お做され並和殿と我門七名  
俱不防禦使さるべと仰渡されて且即刀不擬せれる御大刀と各一口賜て這  
回軍旅の間備軍令違ふ者あふ先斬て後告よと捉さるひ余余折和  
殿と大村大角の御使して他御不在れ和殿不賜るを則咱等と遮與ぬ又  
大角不賜ると現八預けぬはあつと咱等と地の出陣の始より其御大刀さへ  
腰不帶て身不帶刀の言を數言且青海波の名馬さへ牽せまると心操の嚮解  
示せし如し余余和殿折れよ。今日の御陣よか多て且軍功の拔萃るひの  
君命と美らむて防禦使の大任辱らるる求て館の御本意不稱ひぬ武  
門の真加あまの一期の面目羨むべ。卒々御大刀と遮與ぬ。このひ々軀と腰と  
撈と三刀佩ると中の一刀と取先親兵衛の謹て受戴る腰不佩て身と

退せ答るる臣等京師之權相の爲豪留せられて聖御使と果し危  
如窮存亡の時を知らぬ身他御不在りける君恩當敬の義兄弟異なるを  
仰せられ身を措か所を辱し拜戴受納侍ぬ却大村の何等の故不他御遣  
表ゆりやと問ふを信乃の推察せざる事由われ今明々地不告か  
そら後かく知りけれ。答て現八を見うて大飼の那折大村は賜る御大刀の  
あつ。今も猶あるやと問へ現八然りと仰あり。後異日隊配と定められ咱等  
和殿と共侶御曹司不従ひまるとる地の寄隊らら向へ大村さへ遠らる然  
役果され他不件の仰を傳へ御大刀と遮與ぬ。因て當日軍師と就て情地不  
御旨と請なり。館聞召て開我思ひ足らぬ現八を返辟させ大角不値  
遇せし。他の亦大士とる明徴と知りと鉄鎧一丸の縁故とて件の大  
刀と現八不與せられぬ。今隊配と定る方りて。実不是不便不る開いの



儘毛野渡しぬ大角虫別人をりて遣去しと仰りし六那御大刃の洲崎中を  
儘返りしをて大阪を渡與らんと聲低やくは答る折らぬ雪代四郎直塚純  
二漕地喜勘太右の伴當野兵並木政木大左考嗣石龜次因太越鯨三向  
水五十二天枝獨結素も吉且三四的と須々利が下の兵も長尾景春の像  
長る直江包道中佐美職政と力戦して敵も敗り追走せし四下は敵の在る  
あか俱隊の兵を従へ猶親兵衛を援へる。索めて這里小まれば親兵衛  
是を勞きて孝嗣以下新参の毎と則現八並直元逸友秋本等小徳々と正  
引合ふ大家其義旗勤軍の大功を松替浩処小葛西三郎は藩の村長  
故老莊客毎針脛衣して鎌竹槍を携う我隊の里見の防衛使を索めて  
俱勝軍の壽詞を唱て且小入毎八年来里見殿の仁政を慕ひしる人ど  
嚮小寄隊の敗北ありと追駈きて一人も脚を立させぬ。れも敵の首を捕る

とと鏡のつらと徳はての首級齋のつら開か中ハ游我殿の権臣の横堀史  
在村の那身矢傷死するが乗る馬の鞍局小俯る隨て来なければ分捕はり  
いぬ他民を虐る奸佞の者も既ゆて死しれ小人毎里見殿へ孝順の  
證せんと其首斬て持参仕りし今又今來路を亦失傷死する落人  
中他の則在村が次職も同惡の佞人新織帆大夫素行を知らる者の告  
開も首捕ての参りぬ。実檢を賜ひてを多く期て二級之首をまわす  
信乃の引よを得と檢て這在村と素行の嚮小我射て斃せし我君仁義の御  
軍令あれも這在村素行の君と惑一團を謬罪死を容る悪人なれば必梟首  
せらるべし大義を勞り現八も亦村長も向いて若くは便宜なれ約莫  
今日の聞戦敵の自家の陣殺の者も其亡骸を拾集めく便宜の寺院へ  
瘞む。を親兵衛らちて大塚大飼西賢兄の患をん殘り殺を去る。則館の







よ。埋めま。欲ま。底深。試。石を投入。水音。幽。折。  
 あり。然。底。地。秘。耶。捺。落。積。誰。底。不。知。を。喚。  
 傲。言。真。實。立。陳。親。在。衛。守。沈。吟。井。亦。奇。我。御。馬。  
 行。騎。馬。那。坑。陷。下。受。者。飲。底。至。故。其。水。也。死。  
 ぞ。知。力。竭。日。累。埋。坑。詰。信。乃。諾。ひ。  
 我。多。思。因。患。案。嘗。聞。五。十。留。河。原。岡。山。原。是。土。民。們。  
 暴。河。洲。波。折。其。壤。遺。方。心。築。成。遮。莫。那。岡。僅。小。  
 暴。河。隔。國。府。臺。相。對。敵。備。那。岡。據。守。城。守。為。害。  
 あり。利。然。也。禮。不。國。壘。卿。大。夫。恥。我。異。日。凱。旋。折。  
 あり。美。館。必。那。岡。明。非。如。路。近。民。皆。耕。稼。暇。  
 あり。每。日。田。年。歷。一。貫。一。車。功。成。愚。公。中。稔。至。然。

思。ま。と。ち。譚。信。乃。現。八。等。直。元。逸。友。秋。本。水。姥。雪。以。下。の。母。  
 あり。件。の。論。議。を。感。佩。し。其。英。才。を。羨。し。け。り。義。成。主。の。次。の。年。も。葛。  
 あり。節。二。御。の。民。課。五。十。四。田。の。岡。を。鋤。除。せ。り。底。不。知。の。坑。を。填。め。さ。せ。り。民。比。皆。其。  
 あり。盛。德。を。慕。ふ。の。故。招。れ。り。聚。合。す。其。後。を。憐。れ。り。僅。小。一。稔。可。り。件。の。  
 あり。岡。を。鋤。執。畢。り。件。の。坑。を。填。め。果。し。義。成。主。又。土。民。五。十。稔。の。調。首。を。饒。り。て。  
 あり。其。頭。の。曠。野。を。送。り。鋤。せ。り。新。田。開。發。の。美。を。教。め。り。民。皆。勉。ひ。て。勉。ま。る。者。あり。  
 あり。あり。井。も。二。稔。可。り。て。新。田。を。開。く。數。百。貫。及。び。り。永。く。公。私。の。有。益。ま。る。け。り。然。れ。ば。  
 あり。課。役。の。葛。西。二。御。の。衆。民。と。安。房。藩。中。人。と。心。同。一。力。を。勸。せ。り。害。を。除。け。り。利。を。興。し。  
 あり。時。の。人。を。新。田。を。名。づ。け。二。御。藩。と。喚。做。し。後。の。人。二。合。半。を。作。る。同。所。を。ん。後。  
 あり。且。今。も。葛。西。假。名。町。の。邊。に。新。田。村。あり。是。れ。も。其。餘。波。を。ん。飲。左。も。れ。右。も。れ。道。徳。仁。  
 あり。義。の。君。臣。の。迹。仰。べ。り。是。後。の。話。を。看。官。前。後。と。照。し。て。見。る。べ。し。







郎紀二六喜勘太們秋李由亦共侶のあるゆ果てを罷りける。姑且まで五十二天  
 素多吉の御向政木孝嗣が樋口維龍を刺殺する。鎗の精妙事は光景箇様  
 箇様との出て三天未説を孝嗣急推林示めて已ねく。哥々々よあま  
 どの何うあんと。このひり親兵衛より向ひく。在下今日の闘戦は長尾が隊長雑兵  
 へ幾人飲敵死あかとも素より名利の為のせよ。其首を捕らむゆひは徳て後美  
 里見殿の御軍令敵の首を捕る者は是軍功の二町也。必重賞をせよと  
 旋まをひくと人の告るあるゆ。虚言をうんと思ひ。和君所藏の神蓑を  
 りて敵の死とも救ふとある。至仁の計議小照して見れば。実仁君の御盛徳感  
 らる。餘り敬服至極仕らぬと謝され。親兵衛信乃現八も孝嗣の今番のま  
 ぶ。義小素藤と對治の折。敵の首を捕らむと誓え。心操を答ふける。當下  
 直元逸友の信乃現八も向ひて。而君のふ思ひのま。約莫這回の一太奇

ト。那野猪のひるま。初寄隊の戦車を焼て二面敗績。時那野猪の敵  
 刺を火も焼れを消せ。見をせ。最怪む。寄隊の二將返  
 去。二面各死を争ふ戦ひ。一時件の野猪六十五頭。又忽馬と出て来て  
 寄隊の騎馬を馳け。幫助もよ。徳速も。尚那野猪微り。他  
 人の知を。卑職の成氏主の一陣を敗り難。勢ひ。告れ。現八點頭て開  
 亦。同意。那野猪の幫助もよ。然る。骨を折ら。寄隊の副將を  
 生。物ゆ。寔。可。賀。々。祝。信乃。笑。局。入。却。親。兵。衛。小。信。々。と。雷。猪。の  
 事。の。顛。末。を。告。れ。親。兵。衛。感。嘆。一。時。唱。号。も。亦。京。師。不。在。一。時。故。画。の。虎。小。靈。雲  
 湧。て。抜。出。く。山。小。入。り。管。領。政。元。主。の。為。小。對。治。去。け。奇。談。あり。其。首。尾。の。箇  
 様。々。々。と。徳。用。堅。削。の。毒。惡。政。元。主。僕。の。奸。詐。並。五。虎。の。確。執。横。死。及。秋。條。廣  
 賞。賢。才。の。計。議。ま。當。時。の。崖。略。を。詳。小。説。示。せ。信。乃。現。八。も。亦。大。家







のく。憊る必死の毎も共亦再生の其の験あり。代四郎の腰帯も神某と  
 一個々々其古ふ冷まりて且瘡口も某と布く。輕た即時も甦生るもあり。重  
 一時或二時之時の程も呼吸も皆我も復らぬる。登時秋季與保某の  
 再生の敵兵を勦り尉めく。里見殿の軍令の箇様々々と仁義の要領と説示不  
 聞戦へ已とせざる所ゆ也。其本意もあつた。あつて自家の士平ふ令と  
 專當の敵と戦果も果とも首と捕るを功とせられ既も勝負定りて閉戦  
 果ても首実檢とゆれも仁慈のたのうのさる事。非如敵の士平ふとも戦  
 ひ難義も及ぶ時君の爲に戦死するべし。是忠臣之誰か憐むらざるん其陣  
 歿の毎大江親兵衛が神授の仙丹をのり。半て返遣さべしとある。御曹  
 司の御説ふより。我門施某の頭人等。汝速降んと願ふ者へ則留を召  
 するべし。又其本費へ還らむ欲者者へ隨意返遣さるべし。との言ふより

主張せよ。と言叮寧論示せ。大家夢の覚る如く其大仁と神某の經  
 験即妙なるを感びて感涙坐す。杖むも敬服せざるけり。然れども  
 有名の勇士もあつた。再生の恩もあつて降参せんことを放ち遣はれんと  
 願ふ者も亦尠く。秋季與保某の義を以信乃現八親兵衛も報て且義  
 通の下知も。放免せざる。寄隊の頭人。花内外助。建柴浦。八樋口。小  
 二郎。梶原。後平。二。萩野。五九郎。科。草七郎。望見。一。郎。是れ人の餘猶あるべし。  
 然れども頭人等も異日君邊にかへり。里見の仁心。箇様々々と神某施  
 しのりも。詳し告ぐる。頭定景春。駭嘆して。徴りて後悔せざる。あつたり。  
 あをり。里見數世の後も。山内。扇谷の兩管領。敢境を侵さ  
 るる。り。この一奉ふより。人間話。休題。あの日。又神某の奇效あり。再  
 生する。寄隊の雜兵。は。降らんと願ふ。も。日定。皆。國府。臺の







ひふ似ひふ現ひふ八ひふのひふ誅ひふりて。肚裏ひふの思ひふふ。昨日ひふも亦ひふ隔ひふ昨ひふの岡山下ひふの闘ひふ戦ひふの  
寄隊ひふの一個ひふの仇ひふ武者ひふも。謬ひふく這頭ひふの河ひふ不ひふ陥ひふて溺ひふ死ひふま。もあ。今ひふ引ひふ揚ひふて  
と。檢ひふせ。我ひふ疑ひふひを解ひふく。よ。き。けん。と。尋ひふ思ひふを。あ。聲ひふと。立ひふ。登ひふ。兵ひふ。每ひふ。今ひふ。あ。  
艦ひふの流ひふれ。係ひふり。て。あ。那ひふ屍ひふ骸ひふと。被ひふ揚ひふ。と。叫ひふ。高ひふ師ひふ。何ひふと。応ひふ。一ひふ人ひふ。蝨ひふ。く。釣ひふ  
索ひふも。件ひふの屍ひふ骸ひふと。拭ひふ。止ひふ。れ。自ひふ餘ひふの。篙ひふ師ひふ。力ひふと。勅ひふ。して。連ひふ。り。艦ひふ。と。漕ひふ。ぐ。程ひふ。  
艦ひふの。航ひふ。て。前ひふ。面ひふの。岸ひふ。よ。寄ひふ。り。け。り。然ひふ。も。現ひふ。八ひふ。ち。尚ひふ。岸ひふ。小ひふ。登ひふ。り。今ひふ。係ひふ。留ひふ。る。浮ひふ。死ひふ  
骸ひふと。艦ひふ。の。被ひふ。登ひふ。る。是ひふ。を。見ひふ。る。不ひふ。果ひふ。して。寄ひふ。隊ひふの。大ひふ。將ひふ。を。あ。ら。ん。ぞ。む。這ひふ。人ひふ。年ひふ  
齡ひふ。二ひふ。十ひふ。許ひふ。を。面ひふの。色ひふ。白ひふ。く。眉ひふ。厚ひふ。く。あ。相ひふ。貌ひふ。野ひふ。ら。む。身ひふ。の。上ひふ。緒ひふ。絨ひふの。薄ひふ。鍔ひふ  
鎧ひふの。上ひふ。小ひふ。梧ひふ。桐ひふ。の。鳳ひふ。凰ひふの。浮ひふ。紋ひふ。あ。故ひふ。金ひふ。襪ひふの。戰ひふ。袍ひふ。を。被ひふ。下ひふ。あ。皁ひふ。皮ひふの。尻ひふ。鞋ひふ  
拭ひふ。る。黃ひふ。金ひふ。裓ひふ。裝ひふの。大ひふ。刀ひふ。と。佩ひふ。ら。り。開ひふ。ぐ。乳ひふの。上ひふ。三ひふ。寸ひふ。許ひふ。髑ひふ。髑ひふの。外ひふ。を。射ひふ。ら。れ。居ひふ。  
征ひふ。箭ひふ。一ひふ。枝ひふ。見ひふ。深ひふ。く。立ひふ。く。を。儘ひふ。と。れ。あ。り。且ひふ。頭ひふ。鎧ひふの。眉ひふ。額ひふ。を。又ひふ。く。見ひふ。る。不ひふ。純ひふ。金ひふ。也ひふ。

彫ひふ。做ひふ。一ひふ。の。竹ひふ。均ひふ。小ひふ。群ひふ。雀ひふの。花ひふ。號ひふ。の。れ。が。原ひふ。來ひふ。是ひふ。の。後ひふ。生ひふの。豫ひふ。聞ひふ。幼ひふ。德ひふ。口ひふ。寄ひふ  
隊ひふの。一ひふ。將ひふ。扇ひふ。谷ひふ。定ひふ。正ひふ。主ひふの。嫡ひふ。子ひふ。あ。上ひふ。杉ひふ。五ひふ。郎ひふ。九ひふ。朝ひふ。良ひふ。王ひふ。欣ひふ。然ひふ。と。ま。定ひふ。正ひふ  
處ひふ。長ひふ。子ひふ。也ひふ。洲ひふ。崎ひふ。寄ひふ。寄ひふ。水ひふ。軍ひふの。副ひふ。將ひふ。と。雪ひふ。上ひふ。上ひふ。杉ひふ。式ひふ。部ひふ。少ひふ。輔ひふ。朝ひふ。寧ひふ。主ひふ  
る。一ひふ。要ひふ。を。あ。れ。と。尋ひふ。思ひふ。と。あ。り。其ひふ。前ひふ。を。あ。ら。ん。と。被ひふ。合ひふ。り。て。見ひふ。る。不ひふ。前ひふ。幹ひふ。小ひふ。漆ひふ。せ。  
四ひふ。箇ひふの。細ひふ。字ひふ。あ。り。て。犬ひふ。山ひふ。忠ひふ。與ひふ。と。讀ひふ。れ。現ひふ。八ひふ。憶ひふ。を。愕ひふ。然ひふ。と。肚ひふ。裏ひふ。の。又ひふ。思ひふ。ふ。  
や。原ひふ。來ひふ。昨ひふ。日ひふ。水ひふ。路ひふの。寄ひふ。隊ひふ。と。水ひふ。戰ひふの。勝ひふ。負ひふ。あ。り。時ひふ。の。朝ひふ。寧ひふ。を。道ひふ。節ひふ。射ひふ。て。  
水ひふ。中ひふ。へ。落ひふ。せ。り。ん。然ひふ。が。て。あ。れ。這ひふ。屍ひふ。骸ひふ。安ひふ。房ひふ。欣ひふ。相ひふ。摸ひふの。浦ひふ。よ。り。て。流ひふ。々ひふ。と。  
一ひふ。宵ひふ。經ひふ。て。あ。の。暴ひふ。河ひふ。漂ひふ。ひ。入ひふ。り。今ひふ。我ひふ。艦ひふ。の。楫ひふ。り。よ。り。稍ひふ。是ひふ。を。知ひふ。る。事ひふ。不ひふ。用ひふ。意ひふ。ふ。  
あ。て。不ひふ。用ひふ。意ひふ。さ。る。前ひふ。よ。り。約ひふ。束ひふ。あ。ら。が。如ひふ。死ひふ。の。噫ひふ。奇ひふ。る。る。る。妙ひふ。る。か。も。あ。の。人ひふ。一ひふ。身ひふ。甲ひふ  
冑ひふ。あ。る。水ひふ。底ひふ。に。沈ひふ。む。と。浮ひふ。流ひふ。れ。も。亦ひふ。奇ひふ。入ひふ。意ひふ。ふ。這ひふ。鎧ひふの。薄ひふ。鍔ひふ。も。水ひふ。の。入ひふ。を。  
も。沈ひふ。む。と。あ。の。那ひふ。南ひふ。倭ひふ。刀ひふの。類ひふ。も。欣ひふ。然ひふ。と。あ。の。琴ひふ。高ひふ。が。浮ひふ。劍ひふの。類ひふ。も。欣ひふ。然ひふ。と。あ。の。左ひふ。ま。も。

八ノ傳ノ事ノ本ノ二  
七





八十八

十八

水碓の武者



やきりくろ  
笠前所河不  
現八敵将を  
いん  
盤生

八十九

文彦堂



右もあれ。是れは小より。精きる。昨日洲崎の澳必寄隊定正主の大軍と  
 水戦ありて大阪が謀る所の八百八人ひかれて敵を血みせしむ。あれども  
 昨日這里の寄隊の士卒の陣歿あるまら。大江親兵衛が仁術をのり  
 多く生して返せし。あの人。是寄隊の總大将。定正主の愛子あるん  
 知らず其死を救ひし。我君大仁博愛の御盛徳。欠る所あり。後  
 悔し思ふこともあらん。是れ亦知るべし。然りとて。あの人矢傷を身負  
 みて水中に落しより。大洋數十里と漂流せり。既一夜を歴せし。非如  
 大江が神業ありとも。救ひ給ふべし。かたが思へども。先親兵衛が告ぐ。商  
 量する所。不如と。吐し腹み答ぐ。主意既決り。一。軀。一個の雑兵を  
 臺の城へ走り。親兵衛の告ぐ。那神業と乞せし。親兵衛は時を  
 移さず。伴當才小二三名をのり。其使と俱小あしければ。現八則親兵衛と

艦小請乗せ。席を譲りて告ると。上。寫。如く。且其意衷を鮮示して。件の  
 屍骸と見せし。親兵衛隨即檢し。畢。現八に向ひて。命。大飼和殿の推  
 量妙。ある。寄隊水軍の副將と。朝寧ある。違ふべし。あの人命數  
 いま。盡。且平生隱匿する。死して二十四時を過ぎ。活ま生ざる。とあらんや。  
 然。今。あの死を救ふ。拘置する。那大敵。之。徴。不足のぬべ。あの人を異日  
 犬山が傳へ。夢。知る。と。あ。腹。立。げ。れ。ども。あ。道。即。が。仇。の。子。を。正。敵。  
 あ。ら。ざ。れ。ば。飽。き。盡。ま。る。要。る。所。仍。入。実。和。殿。の。意。見。の。如。く。是。の。人。を。活  
 せ。置。む。館。の。仁。慈。天。地。の。如。く。御。盛。徳。の。違。ふ。べ。兵。毎。又。蝨。く。這。死。人。の。戎。衣。を  
 脱。せ。よ。と。ふ。雑。兵。あ。ら。ぬ。て。找。し。寄。る。者。兩。三。名。左。右。して。水。死。の。武。者。の。戎。衣。を  
 解。果。し。親。兵。衛。則。腰。を。撈。り。て。不。死。の。神。業。を。命。じ。先。死。人。の。口。中。へ  
 兩。三。番。推。入。れ。て。又。その。矢。傷。へ。推。入。れ。つ。そ。上。の。又。某。と。布。泥。る。ど。く。又。其。胸



膈へ塗り畢る。却筋力ある雜兵の吟呻て死人を倒抱せり。と徐小推立  
 せり。其腹内なる所の潮水を吐き出さる。壁臺を輾りたる。其口より出る  
 水幾許あると知む。既や吐盡せし時や。推居させ是を見る。初土の如  
 く。その面部總身稍血色と出。来て中腕温熱ある。似れば親兵衛と  
 歎びて。恁て這人必生くべし。徐小城内へ昇入させ。臥さる。あてり。とひふ  
 現八ある。又雜兵を城へ走らせ。轎子一挺昇せ。あてり。則其轎子の  
 件の武者と。ちり乗せて。昇せ。其臺の城へ遣。現八親兵衛の左右小立  
 也。程小大飼の隊の兵毎も。艦より出。轎子と。ちり守り。存整。徐而大飼  
 現八大江親兵衛の俱。函府其臺の城か。りあり。則犬塚信乃の件のよと告  
 知せ。且東辰相不就。義通君の夢え。上て却水死の少武者と。儘函室未  
 臥あり。士卒は是を守り。約二時許。那人遂に甦生。と。動

又脚を動。程小稍我の復り。命を頭を拾げ。己と守る士卒と見て  
 うら驚く。所以と知む。其身のあ。在る。と悟難。士卒の向へ。士卒則其  
 名を告る。ふ心の。驚れ。身。救ふ。蘇生。果敢る。敵の城内。俘囚  
 作り。悔。一。思。の。可。為。由。一。恁。而。現。八。親。兵。衛。信。乃。等。義。通。君。の  
 旨。と。請。ま。り。且。辰。相。告。て。直。元。と。共。侶。小。這。蘇。生。の。少。武。者。を。城。の。向。注。廳。小  
 召。出。て。其。姓。名。来。麻。生。を。鞠。問。ま。り。詞。を。卑。く。一。礼。を。正。く。あ。り。叮。寧。小。問。慰。め  
 ま。り。少。武。者。の。里。見。君。臣。の。仁。小。愧。義。小。服。一。て。懶。陳。ま。り。と。言。比。皆。其。実  
 情。と。招。了。ま。り。是。の。よ。り。て。這。人。の。管。領。定。正。の。度。長。子。を。式。部。少。輔。朝。寧。下  
 ち。も。正。可。不。知。れ。又。昨。日。洲。崎。の。澳。の。閉。戦。不。奇。隊。敗。績。ま。り。事。の。光。景  
 也。那。里。の。告。と。待。ぎ。て。這。里。の。風。く。吹。え。け。り。支。得。と。失。天。在。り。又。人。不。在。り。求。る  
 と。死。ハ。則。得。棄。る。と。死。ハ。則。失。ふ。あ。り。其。得。失。の。人。不。在。り。者。又。不。用。意。や。て。得。ぬ



氏  
い  
ら  
る

るあり。小心しょうしんあて。反さかて。是これを失うしなふ。とあり。這得失このうけあつてん天あ在いり。人ひとのよく。做なす。所ところあり。とせ。  
 譬たとへば。老らう氏しの所ところ云いふ。泰山たいしやん山さん。代たひ貨かあり。代たひ貨か心しんる。者もの。れを得うるといふ。が如ごとし。看み官くわんあり。お意い。  
 廿に。蓋け造ぞう陸りく路ろニふ所ところの。閉ひ戦せん。満まん呂りょ復ふく五ご郎らう重じゆう時じ。寄よ隊たいの。大だい將しやう朝てう良らうと。深ふか川せんの。  
 磯いそ。赶かん菟と逼ひつり。既すで。小せう橋きやう。を。べり。と。反さかて。大だい阪はん毛もう野や。獲とれ。ら。這この得う失あり。人ひと在いり。  
 又また。洲しゅう崎さきの。澳あつの。水みづ戦せん。大だい山さん道だう節せつ忠ちゆう與よ。上うへ。杉すぎ朝てう寧ねいと。射やて。落おれ。れ。ど。も。矢や場ば。  
 其その首くびと。捕とる。由よし。反さかて。現げん八はち。其その敵てきと。獲とれ。ら。れ。刺さ親しん兵へい衛ゑい。か。神かみ茶ちや。朝てう寧ねいの。  
 再また生せいり。這この得う失あり。天あ在いり。人ひとのよく。作しやくを。所ところあり。是こゝ故ゆゑ。日ひ得とれ。失あり。天あ在いり。又また人ひと。  
 在あり。よ。思おもひ。い。あ。る。べ。く。世よの。人ひとの。理り。暗くらけ。か。惑まよふ。て。且かつ。天あを。怨うらむ。人ひとを。咎とがめ。む。ら。  
 一ひと。升のぼる。醒さま。欲ほむ。者ものの。老らう婆は。深ふか切せき。是こゝ本ほん傳でんの。本ほん傳でん。を。所ところ以もて。越こえ。先ま。  
 其その緒いとを。解とく。道みち。即すなはち。朝てう寧ねいと。射やる。後のち。回かへ水みづ戦せんの。段たん。具ぐ。看み官くわん。前まへ。後のち。と。照あら。て。る。べ。く。  
 南なん總そう里り見み。八はち犬けん傳でん。第だい九く輯しゅう。卷くわん之の。四し十じゅう二に上じやう終しゆう。

八犬傳第九輯卷之四十二

文海堂藏



